

テツとの出会い 【中学年3 - (2)】

- 感動的な実話をもとにした取組み -

- (1) 主題名 生命の尊重 [3 - (2)] 関連項目 [3 - (1)]
 (2) ねらい 命について考え、命あるものを大切にしようとする心情を育てる。
 (3) 資料名 「テツとの出会い」
 (4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点
導 入	1 動物クイズを する。	このクラスのみんが飼っている動物 で一番多かったのは何でしょう。	飼育経験のある動物につい て考えることで、価値への 方向付けとする。
展 開	2 資料を読んで話 し合う。 3 テツの世話を続 けるぼくの気持ちを 考える。 4 テツが死んでし まったときのぼく の気持ちを考える。	テツをみつけた時、ぼくはどんなこと を思ったでしょう。 ・だれがこんな所においていったんだ。 ・だれか何とかしてあげればいいのに。 ・こわいからしらんぷりしよう。 先生に、ぼくはどんな気持ちでたのん でいるでしょう。 ・どうしても助けてやりたいんだ。 ・そのままにしておくことなんてでき ないよ。 ・ほっておいたら、死んでしまうよ。 ぼくはどんなことを考えながらテツ の世話をしたでしょう。 ・死ななくてよかった。 ・早くいっぱいえさを食べられるよう になってほしいな。 ・絶対元気にしてやるぞ。 テツが死んでしまったとき、ぼくはど んな気持ちだったでしょう。 ・もっと生きてほしかった。 ・元気になると思っていたのに。 ・せっかく世話をしてきたのに残念。	資料を2つに分割し、提示 する。 犬の様子からほっておく と、死にそんなことをおさ える。 犬のためになんとかしてや りたいというぼくの必死の 気持ちをおさえる。 少しずつ元気になってきた テツの様子を見て喜び、「生」 への望みを持ち始めたぼく の気持ちをおさえる。 死んでしまってもとても残念 に思う気持ちをおさえると ともに、生き物の死を経験 したことがある児童にはそ の時の気持ちも合わせて発 表させる。
終 末	5 教師の説話を聞 く。	・みんなが命を大切に思っているんだな。	実話であることを知らせ、改 めて命を助けようとした子 どもたちの思いについてふ れる。 命の大切さ、生き物のこと を思う人たちの気持ちが伝 わるものにする。

テツとの出会い

ぼくがテツに出会ったのは、十二月に入ったばかりの小雪がちらつくころのことでした。

体育の時間にマラソンコースを走っていると、道のわきのみぞにうずくまっている犬がいるのに気がつきました。走るのをやめて、こわごわ近づいてみると、だいぶ年をとった犬が、苦しそうに息をハアハアいわせていました。よく見ると、おなかに大きなできものがある、血もにじんでいます。ぼくたちはほっておくことができなくて、学校へ帰って、すぐに担任の田中先生にそつだんしました。

すると、先生は、

「知らない犬だから、かみつくかもしれないし、病気がうつってもこまるだろう。かわいそうだけれど、そのままそつとしておいてあげた方がいいんじゃないか。」

と言われました。それでもぼくたちは、どうしてもその犬のことをほっておくことができなくて、いっしょけんめい先生にお願いしました。先生はしばらく考えていましたが、

「動物のお医者さんに見てもらって、人間にうつらない病気がどうかたしかめてもらってから、どうするか決めよう。」

と言われました。

そこで、クラスのみんなで動物のお医者さんのところへ行くことになりました。

しんさつ台の上の年とった犬をじっくりみたお医者さんは、

「この犬は人につづる病気ではありません。でもすぐに手術をしなければたすかりません。」

と、犬の頭をなでながら言われました。そして、

「みんながこの犬をしつかりお世話してくれるなら、手術の代金はいららないよ。」

と言ってくれました。クラスのみんなですぐに相談して、元気になるまで、ちゃんと犬の世話をすることを約束しました。さっそくみんなで話し合って、犬の名前は、「テツ」になりました。クラスのみんなで交代で世話をすることにして、当番の順番も決めました。

ぶじ手術も終わり、テツが病院から退院してきました。

さいしょのころは、えさや水をやってもふりむきもせず、ずっと小屋のすみにつづくまっただままでした。しかし、毎日かわるがわる世話を続けていくうちに、少しずつえさも食べ始めて、頭をなでてやると、気持ちよさそうに体をのびしたり、ぼくたちの手をぺろんとなめたりするようになってきました。

えさをやったり、小屋のそつじをしたりする毎日の世話は、とてもたいへんだったけ

れど、だんだん元気になっていくテツを見てみると、そんなこともわすれて、みんな一日も休むことなくテツの世話を続けました。

テツが来てから一か月がたちました。そして、やっとさんぽができるようになりました。元気な犬のように、いっしょに走ることはできないけれど、ぼくはテツとさんぽができるのがうれしくて、当番の日がまちどおしくてたまりませんでした。

テツはきつと元気になって、今にさんぽの時にもいっしょに力いっぱい走れるようになるぞとみんなが思っていた時、とつぜん、テツの食欲しょくよくがなくなってしまいました。みんなが心配して、またお医者さんにつれて行きました。

次の朝、みんなが急いで病院へ行ってみると、みんなのひっしの願いもどかず、テツはもう死んでいました。お医者さんが、テツのために集まったぼくたちに、「テツが死んでしまったのはとつてもさんぽだけけれど、病気になったテツをみんながいっしょうけんめい世話をしてくれたことを、きつとテツもよるこんでいたと思うよ。そして、天国へ旅立って行ったんだと思うよ。」と言ってくれました。

病院の外に出ると雪がふり始めていました。ふと、はじめてテツと会った日のことを思い出して、なみだが止まりませんでした。

短い間だったけれど、テツがぼくたちのところへ来た日のこと、そして、はじめていっしょにさんぽができた日のことを、ぼくは今でもわすれることができませぬ。



活用に生かすための実践報告

「テツとの出会い」

1 主題の設定

生命を尊重していこうとする心情を育てていくことは、人間にとって、とても大切なことである。今、社会では、生命を軽視する風潮が多々見られる。そうした中で、本資料の「ぼく」たちが体験した、テツとの出会い・ふれあい・別れを通して、かけがえのない命の尊さをより理解し、人間だけでなく、どんな生き物でも、命あるものを大切にしようとする心情を育てていきたい。

この資料は、子どもたちの身近にいる犬の話でもあり、本資料をきっかけにして、子ども達が今まで経験した生き物の死について、振り返りがしやすく、本時の価値へとより迫りやすくなるのではないかと考える。

2 指導過程の工夫

全文を最初から読むのではなく、テツが元気になっていくまでの様子でいったん切ることで、子どもたちが一生懸命に一つの命を助けるためにがんばっているすがたについて考えさせる。また、後段では助ける努力が無駄になったと考えるのではなく、テツの命を助けるために一生懸命世話をしてきたことを大切に思うような展開にしていきたい。そのためには、最後にテツに対する手紙を書かせると、ひとりひとりがより深く命について考えることができると思われる。

3 発問の工夫

中心発問はテツの世話を続ける主人公の気持ちにせまるものとした。世話の大変さより、命を救うために必死になっている主人公の気持ちをおさえたい。

発問をして児童が答えるという形の繰り返し

になるので、先生に頼んでいる主人公の気持ちを考える場面を役割演技にすると、子どもたちの集中力がより高まると考える。

4 児童の反応（授業後の感想）

テツをみつけた場面では、なんとかしなくてはという気持ちの児童が多かった。また、世話をしている時は、テツに早く元気になってほしいという気持ちのものが多かった。最後に思いもよらず死んでしまったことを知った児童は、せっかく世話をしたのに救えなかった残念さや、出会えたことに対する感謝の気持ちを表した感想を残していた。

- ・一生懸命世話をしたのに何で死んでしまったの。死んでしまってくやしいよ。
- ・テツにあえてよかったな。
- ・さっきまで元気だったテツなのに、なんで死んでしまったのかな。楽しいさんぽがいっしょにできると思っていたのに。悲しいな。
- ・テツ、今までありがとう。

5 実践者からの一言

好きな動物アンケートの結果発表を導入にしたが、楽しい授業の導入になってよかった。偶然、一位が犬だったので、ますます資料に入りやすかった。

資料が犬の話だったので、最後の説話は、人間の命の大切さにつながるような話にすると、話に広がりができ、より価値にせまれるものになると思う。本時だけでなく、おりにふれていくいろいろな場面で生命については考えさせていく必要がある。

なお、本資料は、長野県塩尻市立片丘小学校の実践「5年2組の愛犬テツ」を参考にして、作成した。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

（小方小学校 貞盛倫子）